



慈照寺銀閣。大友政親館の主殿も同じ書院造りの二層楼閣だった

大友時代を  
生きた人々

鹿毛 敏夫

大友政親

書院造りの二層楼閣建築

大友政親は、両統迭立の慣例を破り、家督に就いた室町時代後半の武将・守護大名です。守護大名期の大友家は9代氏継と10代親世以降、双方から交互に家督継承者を出す両統迭立の不安定期でした。そうした中、氏継系から出た15代親繁が両統の融和に成功し、まず寛正3(1462)年に、19歳の嫡子政親に豊後国守護職を譲りま

す。そして文明8(1476)年4月、7代にわたり100年続いた両統迭立の慣例を破り、ついに政親が第16代家督に就きます。また、「木碎之注文」という室町期大友家大工の木割史料(寸法などを記した技術書)には、「文明八年丙申八月十九日二御柱立、同御棟上十一月十四日」とあり、同年に政親が、自身の館の柱立と棟上、つまり主殿の建て替え工事を始めたことが分かります。

さらに政親は室町幕府の後ろ盾を得るため、將軍引退後も実権を握る足利義政に進物を贈りますが、注目されるのはその量です。「大友家文書録」の記録から將軍家と近親に贈った総量を計算すると、太刀11本、鷹眼6万1千疋。鷹眼とは、中央に穴が開いて鳥の目に似ていることから名付けられた輸入中国銭のことで、6万1千疋は銭61万枚に相当。この数値は、政親の家督継承が、莫大な資産を費やしても祝うべき大友家の慶事だったことを示しています。

この記録は極めて興味深いことですが、というのも、親繁・政親父子が莫大な祝儀進物を贈って密接な関係を保った前將軍足利義政の手による二層構造建築物、慈照寺観音殿、いわゆる「銀閣」の建設時期と重なるのです。銀閣の上棟は長享3(1489)年で、政親の主殿上棟の13年後。しかも、政親の主殿は床が「板敷」で、「しやうし(障子)さい立」と記されており、まさに東山文化を象徴する書院造りの二層楼閣建築でした。しやうしさい立とは敷居の溝の両縁に「さい」(付樋端)と呼ぶ細木を造り付けて明障子をはめ込んだ仕組みのことです。

15世紀後半の九州に、京都の銀閣同様の楼閣が有力守護大名によって営まれていた事実は、室町後期西国の文化と経済力の高さを物語っています。  
(名古屋学院大学国際文化学部教授)